2006年5月11日

発表者：清水

フロイト『精神分析入門（下）』（高橋義孝　下坂幸三訳、新潮文庫）

第２５講　不安（p.110 – p.136）

・不安はほとんど全ての神経質者が訴えるところのものであり、自分の最も恐ろしい悩み。なぜ神経質者だけが多くの、強い不安を抱くのか。

神経質者の不安：現実不安⇔神経症不安

＝外界からの危険、予期された障害を認知したときの反応であり、逃避反射と結びついている。自己保存欲動の現われ。

例：白人と未開人の大砲や日食に対する反応

・現実不安は合理的で目的に適ったものではない。目的に適った点は「逃げること」なのであって、「不安におびえること」ではない。不安は度を越して強くなれば、目的に適わなくなることもある（逃走の動作さえ麻痺）。

→不安の特性は危険に対応する準備。ここから一方には、逃走や活動的な防御が生じ、他方、不安状態として感じるものが生じてくる。不安から生まれる準備は、不安の目的に適った面。反して、不安の展開は目的に適わない面。

・不安という言葉を、「不安の発生」を認知することによって陥る主観的な状態という意味。この状態を「情動（Affekt)」と呼ぶ。

情動：・一定の運動性神経支配あるいは発散

・起った運動行為の知覚と、情動に基音を与えるといわれる直接的な快感及び不快感の２つの感覚を含む。

・出産行為の反復

←出産行為の時には不快感、分娩の興奮および身体感覚などの集合化が行われるが、これが生命の危険の生ずることの原型となり、それ以来不安状態として我々によって繰り返される。

・神経質者の現実不安はどのような新しい現象形態や事情を示すのか。

・第一：期待不安、不安な期待

一般的な不安、自由に浮動している不安。適当なものでさえあればどのような表象内容にも結びつき、判断に影響を与え、ある種の予想を選び出し、あらゆる機会を捉えて自己を正当化しようとする。偶然のことも全て不安の前触れと解釈し、不確実なことはすべて悪い意味にしか取らない。心配性、厭世家。→不安神経症という現実神経症

・第二：恐怖症の不安

第一のグループ：強度という点では極端ではあるが、我々にとっては不可解ではない（例：蛇恐怖症）。

第二のグループ：危険との関係は存在しているが、普通この危険は軽視されており、それを真っ先には考え付かない習慣がついている場合（例：状況恐怖症＝汽車、船、橋、独り居）。

→奇異の念を起こさせるは、その内容ではなくてむしろその異常な強さ。

第三のグループ：理解できないもの（街路や広場に対する不安、動物恐怖症）。

→幼児はこのような状況は危険だから避けるように教育によって直接教えられているので、幼い子供のような行動をとっている。

・（上記の）二つの形式の不安は互いに関係は無い。

・恐怖症を全体として不安ヒステリーに数えいれている。転換ヒステリーに非常に近い疾患とみなしている。

・第三：「不安等価」

よく理解できていない。不安と危険との関連が完全に見失われている。自然発生的な発作。不安状態と呼んでいる複雑なものは分裂することもありうる。（例：心悸亢進、めまい、ふるえ、呼吸困難）

・二つの問題（p. 122）

１：神経症的不安と現実不安を関連づけることができるかどうか。

２：神経症の不安をどのように理解したらいいか。

・臨床的観察から得られた神経症的不安を理解するための数々の手がかり（問題２）。

ａ：期待不安あるいは一般的不安状態が、性生活における特定の過程、リビドーのある種の使い方と緊密な依存関係にあること。

例：激しい性的な興奮が心行くまでのはけ口を持つことができず、満足の行く終結に至り得ない人々。

リビドーと不安との間には発生上の関係がある。

思春期や月経閉鎖期の影響。リビドーの生産活動が著しく増大するため。

興奮状態のときも、リビドーと不安との混合や、リビドーの不安による代償が観察することができる。

↓

二重の印象

１：正常に使用することを阻止されたリビドーの鬱積であるということ。

２：問題は身体的な過程。

ｂ：不安というものは広く通用する貨幣。もし情動の動きに属する表象内容が抑圧されるようなことになれば、あらゆる情動の動きが不安と交換される、あるいは交換されうる。（精神神経症、特にヒステリーの分析より）

←ヒステリーでは不安は症状を伴って現われるが、症状に拘束されていない不安もまた現われる。正常な経過に伴う感情が抑圧されると、それが不安によって置き換えられる。

例：不安、羞恥、狼狽、怒り、憤り、敵意

ｃ：強迫行為を示す患者おいて、不安は強迫行為によって覆い隠されていたのであって、強迫行為は不安から免れるために行われていた。強迫神経症は不安が症状形成によって代償されている。ヒステリーの場合にも類似の関係が見出され、それ故、症状というのは通例は不可避な不安の発生を免れるために形成されているに過ぎない。

・神経症的不安と現実不安との間に求められていた連絡（問題１）。

→自我とリビドーとの対立を前提とする。不安の発生は危険に対する自我の反応であり、逃走開始を告げる信号。神経症的不安の場合には、自我は自分のリビドーの要求を突きつけられて、逃走の試みを企てて、この内的危険をあたかも何か外的危険であるかのように扱う（外的危険には現実不安を感じる）。

→「幼児における不安の発生」と「恐怖症に結びついている神経症的不安の由来」を問う。

「幼児における不安の発生」

- 幼児における不安において、神経症的不安と現実不安とは区別できない。一方で、幼児には現実不安を抱きがちな強い傾向があり、原始人や今日の時代に生きている未開人の態度を繰り返している（無知で無力であるために新奇なものや我われには見慣れたものに不安を抱くから）。他方、特殊な気後れを示す幼児に限って後に神経症になるという事実を否定できない。それ故に、神経症の素因は、明白に現実不安をもちやすい傾向によって察せられ、不安状態が第一次的なものとして現われる。成長して大人になっても全てのものに対して不安を感じるので、自己のリビドーの高まりに対しても不安を感じる。劣等感の意識は、幼児期から成人期にまでもちこされるし、神経症の究極の原因ともなる。
- 幼児は､信頼し愛している人＝母親を見ることができると思っているのに､そうでない未知の人を見ることになったので恐れる。幼児の失望と憧れが不安に身を転じたでのであって、使用不可能になったリビドーが、その時には浮動状態のままではいられなくなり、不安として発散される（出産時の最初の不安状態の条件である母体からの分離が反復されている）。
- 幼児の始めての状況恐怖症は「暗闇にいること」と「一人ぼっちでいること」に対する恐怖で、共通点は愛する保護者である母親がそこにいない事。暗闇で抱いている憧れは、変形されて暗闇に対する不安になる。幼児の場合には、使用されないリビドーから生ずるという本質的な特徴において、神経症的不安と共通のあるものが、現実不安という姿をとって現われているのがみられる。本当の現実不安を幼児はそれほど多くもって生まれてきてはいなく、幼児は自分の力を最初は過大に評価して、不安を感じることなく振舞っている（危険を知らないから）。最後には現実不安が目覚めてくるが、教育の結果である。

「恐怖症に結びついている神経症的不安の由来」

使用不能のリビドーはたえず見かけだけの現実不安に変えられ、その結果、些細な外的危険がリビドーの要求を代表するために設定されるので、幼時不安の場合と同様である（幼児の恐怖症は「不安ヒステリー」に数えている後年の恐怖症の原型であり、前提条件であり、序曲でもある）。

二つの疾患（ヒステリー性恐怖症と幼時不安）には機制の違いがある。

リビドーが、抑圧をこうむったある心的な欲動に所属していると、意識と無意識との区別がまだ存していない幼児の場合とよく似た状態が復活し、幼児性恐怖症への退行によっていわば通路が開かれ、この通路を通ることによってリビドーの不安への転換は都合よく行くようになる。不安に転換されることが、抑圧された観念に付随していた情動の運命であり、抑圧過程の重大な部分（今までは抑圧された観念の運命だけを追及してきた）。観念は意識的、無意識的という相違を除けばいつも同一のもので、無意識的観念に対応するものを示すことができる。無意識的なものの中で情動に対応しているものについては、心的過程に関する我々の諸前提を明らかにしなければならない。

不安という形式における発散は、抑圧されたリビドーの最初の運命であるが、神経症患者では、この不安発生を拘束しようと努力する過程が進行しており、さまざまな道を通って成功する。

神経症的過程の二つの段階

1：抑圧とある外的な危険に結びついている不安の形にリビドーを移行させるということ。

2：外的なものであるかのように取り扱われたこの危険との接触を避けさせるような、あらゆる慎重さと保全との体制が作られる。抑圧は、危険だと感じられたリビドーに対する自我の逃走の試みに対応している。恐怖症は外的危険を防御する築城に比較することができる（外的危険はリビドーを代表している、弱点は内部では攻撃に曝されているまま）。

恐怖症の内容は、顕在夢の外見が夢に対してもつのとほぼ同じだけの意義を恐怖症に対してもっている。系統発生的な遺伝によって不安の対象となるのに適しているものが少なからず見出される。これらの不安を醸し出す事物のうち多くのものが、危険と結合できるのはただ象徴関係によってに過ぎない。

不安の発生がリビドーの運命及び無意識の体系と結びついているが、現実不安は自我の自己保存欲動の発現と認めざるを得ない。